

アロマザリングからみた 保育園と守姉

早稲田大学人間科学学術院 教授

根ヶ山光一（ねがやま こういち）

Profile — 根ヶ山光一

1977年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。大阪大学人間科学部助手、武庫川女子大学文学部・家政学部・生活環境学部助教授、早稲田大学人間科学部助教授を経て、1998より早稲田大学人間科学部・人間科学学術院教授。専門は発達行動学。著書は『アロマザリングの島の子どもたち：多良間島子別れフィールドノート』（単著、新曜社）、『〈子別れ〉としての子育て』（単著、NHK出版）、『発達行動学の視座：〈個〉の自立発達の人間科学的探究』（単著、金子書房）など。



ヒトの子育てとアロマザリング

子どもが周囲の影響を受けつつ育つことは、当然のこととして誰も疑わない。だが、「社会が子どもを育てる」といえば、ちょっと待てと眉をひそめる人がある。とんでもない、子どもは（母）親が愛情こめて育てるのが本来だというわけである。

母親の愛情が子どもの健やかな発達に大事だ、という考え方はもちろん正しい。しかしかといって逆に、健やかに育つには母親の愛さえあればいいということにはならないのである。過剰に水やりした植物が根腐れをおこすように、過剰な愛は子どもの健全な発達を阻害さえしかねない。とくに、ともすると親が子どもにつくそうとしがちな日本の育児風土は、その過ちに陥る危険をはらんでいる。母親の示す適度な反発性が子どもの健全な発達にとって必要であるというのは、「子別れ」の視点として筆者がことあるごとに主張し続けているところである。

快いタッチとともに子を受容してやることは、子どもに安心感を与える。また栄養を供給し、身体を清潔に保ち、危険から守ってやるといったことは子どもの生存に必須であり、これも子育てのイロハである。それらはどれも養育する側とされる側の身体的関わり合いに関することである。哺乳類の場合それは妊娠から始まる過程であり、それを担うのは母親の身体である。

身体が担うとは言い換えると身体資源を提供することであり、子どもの成長に応じてその負

担は増加する。ただし動物のなかには、その負担を母親が一身に引き受けるのではなく、父親やきょうだいなどの他個体が肩代わりしてやるものがある。そうすることで母親の負担が軽減され、その繁殖が保障されるのである。母親（マザー）以外の誰かがそのケアを受け持つという意味で、それは「アロマザリング」（根ヶ山・柏木、2010）と呼ばれる。ハーディ（Hrdy、2009）はそのことを『Mothers and others』という気の利いたタイトルの本で議論している。

ヒトの場合は、その肩代わりが他の個体だけでなく、さまざまな事物あるいはその組み合わせのシステムによって多重的になされることを大きな特徴とする（Negayama, 2011）。その結果として母子は「風通しのいい」関係を実現している。そういう母子の風通しの良さが、同時にヒトの子どもの社会性の高さを支えてもいる。むしろ豊かな社会に早く触れさせるために、ヒトは母子間にあえて間隙を設けるように進化したと解釈するほうがいいのかもかもしれない。

そういう言い方が許されるとすれば、そのアロマザリングは単なる母親の代行というよりむしろ、モノ・ヒト・シクミによる壮大な「共同子育てシステム」というべきであろう。母親がその一環にすぎないようなシステムのなかで子どもが育つ、これがヒトの子育ての本質的な特徴であると考えたい。隅々に至るまで文化に裏打ちされたこの世界で、子どもは多様なシステムに支えられながらその文化を身につけていく

のであり、けっして母親個人の視点取得だけに依存しているのではない。周囲との豊かな交渉に目を閉ざして育児主体を母親に限定することは、ヒトの子育ての矮小化である。

アロマザリングとしての保育

保育園は、ヒトがさまざまに発達させてきたアロマザリングの形態のなかでも、その代表格とってよかろう。昨今の女性の自立志向とあいまって、社会でますますそれへのニーズが高まっている。保育園と一口にいてもさまざまなバリエーションがあるが、最大公約数としては母親以外の複数の大人がさまざまな事物とともに存在し、一定のルールの下によその複数の子どもを一定時間預かって世話する。その大人は一般に、子育てに関して所定の教育を受けて認定された専門家であり、またその空間にも一定の基準が設けられ、ある水準の子育てが確保されるように制度化されている。つまり保育園とは、社会が望ましいと考える育ちを子どもに保障する場であり、幼い子どもを持つ男女にとって、後顧の憂いなく社会進出を実現させてくれる重要な制度である。幼稚園や学校もその意味では同類であるが、幼い子どもを受け入れ世話するという意味で、保育園はより意味が大きい。

筆者は同一の子どもを家庭と保育園で観察し、比較したことがある（根ヶ山他, 2008）。家庭こそが平穏な場で保育園はその代替とするならば、子どもは家庭ではさして泣かず保育園でよく泣くと予想されるであろう。しかし現実には正反対で、子どもは家庭ではるかに多くかつ強く泣いていたのである。このことは私たちに、保育園が家庭の代替物でなく、むしろそれと質的に異なる独自の環境であることを教えてくれる。保育園にいる子どもは、家庭で親という時とは違うモードで周囲を見て、それに関わりかけていたのである。私たちはそれを、公人として自己コントロールを学ぶ場としての保育園と、私人として自己主張を学ぶ場としての家庭という対比でとらえた。この結果は、保育園が家庭の代替環境ではないこと、アロマザーとしての保育者が単なる母親のピンチヒッターでは

なく、子どもの発達にとって独自の意味を担った大人であることを強く示唆している。

子育て支援施設としての保育園の役割は、子どもの預かりだけではない。それ以外にも、親への学習機会の提供や、子どもを核とした地域のネットワークづくりといった重要な機能がある。地域の高齢者やベテランの親は、未熟な親に対して育児のサポーターとなりうる。子どもを持ったばかりの新米親でそういった隣人や親族のネットワークを欠く場合、専門の知識と経験を持ったプロがお手本になったり育児の相談役になってあげることが、その親にとってさぞ心強いことであろう。

さらに、親の側に何らかのリスク要因がある場合、このような支援はより一層有効に作用するに違いない。筆者はつい先日英国スコットランドにおいて、貧困や薬物中毒、精神疾患などの問題を抱えた家庭の親支援のために設立されている保育園（Family Centre）の一つを訪問してきたばかりである。英国は階級社会であり、下層家庭における状況の深刻さは私たちの想像を超えるものがある。その施設の特徴的な取り組みの一つとして、そういった家庭への施設スタッフによる Play Visit という訪問があり、それにも同行させてもらった。それは、高度に制度化されたアロマザリングの一例である。ここでその取り組みを紹介しよう。

それは、毎週1回、専門家が2名一組でこのような家庭を遊具持参で訪問し、小1時間ほど子どもと遊んだり親の相談相手になったりする行政サービスである。子どもとの遊びを通じてリスクを抱える家族の子育てを支援しよう、というのがその目的である。また毎週水曜日にそういった親子に施設に集まってもらい、終日いろんな活動をする Family Day というプログラムもある。写真1は、ティーンエイジャーですでに子どもが二人いるシングルマザーの家庭訪問に同行した時に、親の同意を得て撮影したものである。この家庭に通い出してからまだ数回目の訪問で、現在はまず子どもと楽しく遊び、それを通じて親に打ち解けてもらうよう働きかけている段階だという。

アロマザリングからみた保育園と守姉



写真1 英国における家庭訪問プログラム

次々とくり出されるさまざまな玩具や歌などでスタッフと楽しげに遊ぶ子どもの様子が、日差しの乏しい部屋の空気を明るくしていた。しかしこの訪問の目的は親子との遊びに留まらない。こういう介入を通じて徐々に親に胸襟を開いてもらい、究極的には子育てリスクをもつ親への支援を目指している。このような取り組みが、子どもの発達と親の育児力をうまく促進することになるよう願うばかりである。私は今ゼミの院生とともに、震災復興支援活動を行っているが、家族のこと、住まいのこと、仕事のこと、補償のことなど幾多の問題を多重的に抱え、ひっそりと息を潜めているご家族へのアクセスは個人情報保護の壁が厚く容易ではない。英国でこのような行政サービスの連携が整備されていることに、かつて「ゆりかごから墓場まで」という社会福祉を進めた国の面目を感じたのである。

保育園と守姉

この英国の試みは、子どもの預かりとリスク家庭への訪問が併存する形で、親を専門家の育児に触れさせる機会となっている。この構図は、日本の保育園的アロマザリングと相通ずるところがある。一般に保育園は、そのような親への明示的・暗示的教育機能を大なり小なりもっていよう。いわば、子の養育モジュールと親の教育モジュールの併存型アロマザリングである。他方、サル社会では、未成熟の個体（主にメス）が遊びとして子どもの世話をするというアロマ

ザリングが存在し、若い個体が幼体への世話遊びを通じて、将来の子育ても知らず知らずのうちに学習している。これはいわば、子の養育モジュールと親になるための教育モジュールの重畳型アロマザリングである。同じくアロマザリングといいつつ、この二つは大きく異なっている。

写真2は、多良間島という沖縄の離島の様子である。この島独特の風習として「守姉（モリアネ、現地の言葉でダクネエネエ）」という子守りがある（詳しくは根ヶ山、2012をお読みいただきたい）。小学生程度の子ども（主に少女）が、赤ん坊の親から見込まれてその子育てを手伝うのである。遊びの関係だから、かわいがるばかりでなく、時には喧嘩したりののしったりもしているし、幼児も泣きながらついていったりしている。少女はそうしながら、子どものあしらいを知らず知らずのうちに学習していく。英国の上記施設と異なるのは、専門家によるルーティン化した仕事ではなく近隣の子どもが遊びのなかで子どもの相手をするという点で、むしろ上述のサル社会でみられるアロマザリングに近い。



写真2 多良間島の守姉

守姉を依頼する時には、正式には結納のようなことをするという。守姉の家庭は「ネエネエヤー」、その守姉の母親は「ダクアンナ（アンナ＝母親）」と呼ばれ、守姉と赤ん坊とは双方家族ぐるみのつき合いとなる。守姉の関係が成立するということは、実は赤ん坊の家族と守姉の家族とがある種の疑似姻戚関係に入ることを

意味するのだ。つまり、子どもが人々を結合させる契機となっており、子育てが島のソーシャルネットワークの拡張の仕組みとしても機能している。島では守姉以外にも、長女がきょうだいの世話をする場合やオバア（高齢女性）が子どもの世話をする場合などがある。つまり、この島には少なくとも4種類（きょうだい、少女、少女の母、オバア）のアロマザリングがあることになる。また同時に、父親など男性による育児参加もよくみられる。

保育園は社会が家庭に提供する制度といえるが、守姉は少女と赤ん坊を核として豊かな地域ネットワークを生んでいる。守姉はつい最近まで、島の子育ての重要な構成要素であった。ところがこの習慣は、最近急速に下火になりつつある。本土復帰後になされた保育園の設置が、まるで外来種の植物が在来種を駆逐するごとく守姉をどんどんとかき消していったのではないだろうか。

保育園は優れたアロマザリングの場ではあるが、そういう点からみると、次の子育てを担うべき少年少女にとって恰好の「教師」である乳幼児を、彼らの目前から遠ざけてしまう場でもある。守姉は、子育てにおけるインターンシップのようなものだ。そのせつかくの体験の機会が保育園によって囲い込まれてしまっている。それは、学校（および塾などの放課後施設）が潜在的アロマザーとしての少年少女を地域から囲い込んでいることと表裏をなしており、ダブルパンチで少年少女と乳幼児との出会いが遠ざけられている。さらに、保育園の乳幼児たちは少年少女以外の多様な大人や動植物からも遠ざ

けられており、子どもの安全な保育が達成されるという利点の反面、子どもと地域との接触が限定されるという側面もないわけではない。「守ることは拘束すること」である。

風習というものは、ヒトが長い時間をかけて検証し精緻化し、維持してきた生活のしかたである。多様な側面が絶妙に組み合わせられ、まるでジグソーパズルのように複雑なシステムをなしている。それに対して保育園などの新しい制度は、既存の安定した生活システムの世界にパッケージとして割り込んでくる異分子のようなものである。たとえば表1のように保育園的なシステムと守姉的なシステムを比較対照させ、場合によっては融合させて、今後の私たちの子育てスタイルとしてどのような形態が真に望ましいのか、長い時間軸のなかで考え続ける必要がある。

文 献

- Hrdy, S. B. (2009) *Mothers and others: The evolutionary origins of mutual understanding*. Harvard University Press.
- Negayama, K. (2011) *Kowakare: A new perspective on the development of mother-offspring relationship*. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 45, 86-99.
- 根ヶ山光一 (2012) 『アロマザリングの島の子どもたち：多良間島子別れフィールドノート』新曜社
- 根ヶ山光一・柏木恵子 (2010) 『ヒトの子育ての進化と文化：アロマザリングの役割を考える』有斐閣
- 根ヶ山光一・河原紀子・福川須美・星順子 (2008) 家庭と保育園における乳幼児の行動比較：泣きを手がかりに. 『こども環境学研究』4, 41-47.

表1 保育園と守姉の基本特性の比較

	アロマザリングの形態	
	保育園	守姉
養育の担い手	専門家としての保育士	近隣の少女
主に行われること	予め設定されたプログラム	遊びのなかのやり取り
場所	地域の中で囲われ保育に特化した施設中心	地域や家庭など日常の生活の場
接する人物	保育士と幼い子ども	守姉をとりまく地域のソーシャルネットワーク
養育を支えるベース	地域に参入する行政や企業のサービス	地域の自然発生的な風習
養育を枠づけるもの	専門性をふまえた契約的關係	しきたりをふまえた相互扶助的關係
関わり合いの期間	就園期間	生涯
事故のリスク	安全だが自由度は限られる	自由度は高いがリスクあり
主な教育的効果	専門家としての保育士→園児の親	育てられる子ども→育てる子ども
地域における副次的効果	個人や家族間の交流	家族の連結と地域ネットワークの拡張